

2012 年度

# 海外ボランティア 報告書



- はじめに 代表挨拶 P.1
- 海外ボランティア概要 P.2
- カレン族について P.4
- 海外ボランティア参加者一覧 P.12
- 海外ボランティア日程表 P.13
- 海外ボランティア会計報告 P.16
- 参加者感想文 P.18
- アンケート P.28
- 活動写真集 P.30
- 編集後記・ご協力のお願ひ P.33

国際協力 NGO NESTEP

オムレート村

2013年2月28日～3月7日

## はじめに 代表挨拶

国際協力 NGO NESTEP

共同代表 **藤田 勇樹**

今回、第一回目の海外ボランティアを行うにあたり、たくさんの方のご理解とご協力により、無事に行うことができましたことをこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございます。

この海外ボランティアは今後、新たに設立される国際協力 NGO NESTEP が引き継ぎ、報告会準備を行ってきました。そして今後、第二回目の海外ボランティアを行う予定です。今後とも皆様のご理解ご協力のほど宜しくお願い致します。

さて、今回この海外ボランティアを行うに至った経緯を説明いたしますと、私が 2012 年の 2 月に参加したタイのボランティアがきっかけです。あの時の体験を後輩たちにも経験して欲しい。そんな思いからそのボランティアに、今年後輩たちを誘うつもりでした。しかし、そのボランティアはその年で打ち切りに。継続的な活動は必要。だったら自分で起こせばいい。私はすぐに現地のコーディネーターに連絡を取りました。ボランティアは打ち切りになったけど、今度は私がつなげていきたい。そんな思いを伝えると、快く引き受けてくださいました。私自身の体験を繋げる・伝える。そうして支援を続けることがちょっとずつ形になっていきました。参加者を集める際も自分自身の経験を語り、この活動に共感してくれるメンバーが集まりました。コーディネーターとの調整など初めてのことばかりで準備がかなり大変でしたが、参加者と一緒に活動し、活動中の参加者の笑顔・言葉・体験を見聞きしているとそれが一気に報われました。

改めて、参加者の皆さん、現地コーディネーターのモド羊子、パド・チィ、海外ボランティアに寄付を下された方々、本当にありがとうございました。次回もまた、たくさんの方々とともにカレン族の村に行ける事を願っています。あの素晴らしい体験を日本の若者たちに。カレン族と日本人の絆がずっと続きますように。今後も皆様のご理解とご協力を宜しくお願い致します。

## 海外ボランティア 概要

### 1) 日 程

2013年2月28日（木）～3月7日（木）

### 2) 行き先

タイ・チェンマイ メチェム地区 オムレート村（約30世帯 約100人）

《村人》

- ・村人のほとんどがカトリック信者（一部世帯はプロテスタント）
- ・子ども達が多い。若者の比較的村に残っていた。

《村の設備》

- ・幼稚園、小学校、教会がある。教会は集会所の役割も。
- ・川はなく井戸水を用いているとみられる。
- ・今回の海外ボランティアでは教会の前の広場に共同用のトイレを建設
- ・サッカーグラウンドもある。

### 3) 活動目的

今回の海外ボランティアの目的は「共同用トイレの建設」「子ども達との交流」であるが、根本的な目的が別にある。

電気も水道もインターネットもない。日本での生活とはかけ離れたカレンの人々の「質素な暮らしを体験する」それは、人間本来のあるべき姿を見せてくれたカレンの村「人間の故郷に帰る」ということであって、自分たちの日本での生活を見つめなおし、「人間これでも生きていけるなあ」というのを感じてもらう。

そして、もうひとつの目的が「本当の支援のあり方を考える」である。国際協力に携わる人として、「本当の支援とはなんなのか。」これは決して、一方通行の支援ではなく、「お互いが持っている能力や技術、モノを分かち合う。そして、友となり共に働く」というのを感じてもらうのが今回の海外ボランティアの真の目的である。

### 4) 現地コーディネーター

モド 阿部 羊子（女子パウロ会・バンコク在住・日本人）

パド チィ （レデンプトール会・ディンカオ村在住・カレン族）

※モド・・・「シスター」「修道女」の意味

パド・・・「神父」「司祭」の意味

## 5) 活動内容

- ①各家庭にホームステイ（1世帯に日本人1人）
- ②村人とともに共同用のトイレの建設作業
- ③子供たちとの交流
- ④支援物資のバザー

## 6) その他

- ①現地でのコミュニケーションはタイ語もしくはカレン語

村人との分かちあいの際は、モド羊子が日本語をタイ語に。

パド・チィがタイ語をカレン語に翻訳。パド・チィは英語が話せる。

- ②現地の暮らしを体験する

各家庭にホームステイし、カレンの食事を食べ、水浴びをする。

基本的に電気も水道もない村に滞在。太陽の動きに合わせて生活するため、村には時計はなく、時計で動こうとする日本人との間で行動に差が生じる。

- ③村でのある一日の流れ

6 : 0 0	鶏の声で起床
7 : 0 0	教会でお祈り
8 : 0 0	各家庭でオメ（ご飯）
9 : 0 0	作業（トイレ作り）
1 2 : 0 0	みんなでお昼ご飯
1 3 : 0 0	子供達と遊ぶ
1 7 : 0 0	オルティー（水浴び）
1 8 : 0 0	各家庭でオメ（ご飯）
1 9 : 0 0	教会でお祈り
2 0 : 0 0	分かちあい
2 1 : 0 0	就寝

## カレン族について

### 《文化編》

#### ●カレン族の気質

- ・山林に住むことを好む。
- ・心の平安を何よりも大切にする。けんかをしない。(神様 自然 人との語らい)
- ・農閑期は教会のために作業を行う。
- ・男性と女性の役割がしっかり決まっている。
- ・日本ほど男女の関係はオープンではない。握手以外、肩を組む、抱き合うなどは慎む。
- ・村にお客様が来ると必ず自分の家に招こうとする。
- ・男女の役割がはっきりとしている。

男…畑仕事、建築、子育てにも積極的→カレンの男性は家事に協力的である。

女…家事、裁縫

- ・家は女性のものであり、男性は婿に入ることが習慣である、また女性から求婚する。
- ・村には時計のないところもある。そのため何かと集まりが悪く感じるが、それがカレン族の生活スタイルであり、太陽など自然に合わせた生活をしている。

※村人が我々をもてなす際に必ず根底にあるのが、お客様を一番大事にすることである。お客様は神様によって遣わされたという気持ちがある。特にご飯を何回も招待される。断ることは神様の祝福を断ることで、悲しまれる。

#### ●礼儀作法（我々が気をつけるべきこと）

- ・みんなでいるときなど人の前を通ってはいけない。
- ・人の上にある荷物をとる場合、必ず一声かける。
- ・いろんな家で食事に招かれるが、自分が泊まる家の食事はしっかりと食べること。
- ・お酒をみんなで飲む場合、絶対に一気飲みをしてはならない。一つのコップのお酒をみんなで回し飲み、最後の人が全部飲むという方法をとる。
- ・頭は神聖な場所。頭をなでられる、叩かれるなどの習慣がないので、子供達と触れ合うときは注意する。
- ・足は不浄な部分。足の裏を第三者に向けて座ることを慎む。

## 《生活編》

### ●カレン族の服装



男性は赤色が中心の民族衣装（チェカ）を着る。

未婚女性は白のワンピース（チェバ）既婚女性はツーピースで黒や紺の民族衣装を着る。



カレン族の伝統的な“腰織り”

### ●カレン族の食生活

- ・カレン族の主食は米である。今回訪れた村のお米はジャポニカ米とタイ米のハーフ品種であった。
- ・カレン族の食事は基本的に米とおかずは一品といった質素なものである。
- ・お米は家族を養い、障がいのある方にあげ、お客様に差し出すためにある。そのため足りないと買うこともある。
- ・村に客が来ている場合は先に客に食事を出し、その残りを家族で食べていた。
- ・料理の味付けは基本的に塩辛い、これは高温な環境下で積極的に塩分を摂取しようと

していることが考えられる。

- ・料理の食材としては今回、赤アリ、卵、川魚、スイカ、カボチャ、野鳥、キツネなど。しかし、普段のカレン族の食事はかなり質素なものであることも確かである。
- ・飲み水は各家の壺のようなものに入っている場合が多いが、近年はプラスチック製のタンクに入っている場合が多い。

## ●カレン族の住居

- ・高床式の住居
- ・足踏み式の脱穀機がある。
- ・家庭菜園（バナナ・葉物の野菜）のある（一部）
- ・水道設備、ソーラーパネルが一部世帯にある。
- ・鍛冶場、蒸留酒を作る設備がある（一部）
- ・耐久消費財について

今回訪れたオムレート村では、一部の家庭で自動車、バイク、携帯電話、ラジオ、テレビ、ソーラーパネル、パラボラアンテナなどの耐久消費財を見ることができた。ソーラーパネルはタクシン政権時代の山岳民族の融和政策によって設置されたものである。そのためバッテリーにつないで置いて夜間、多少だが電気（照明）が使える。

- ・【ホビ】と呼ばれるところでトイレや水浴び、洗濯をする。家とは別棟で離れたところにある小屋である。川があればそこで水浴びや洗濯をすることができる。トイレにはトイレットペーパーはない。用をたしたあと、水が入った桶が横にあるのでそれで水を使って手で洗う。
- ・家の下で家畜を飼っている（豚・鶏）
- ・その他、牛・水牛を飼っていて、犬や猫もいる（ペット扱いではない）

## ●動物との共生 ※（）内はカレン語での発音

### 犬（チュイ）

カレン族は度々山へ猟に行く。その際、獲物の搜索や撃ち落とされた後の獲物の位置を探るなどのサポートを行う。

### 猫（サミニョ）

猫の主な生活領域は人と同じ高床式住居の中である。カレン族は住居の中に食料を貯蔵しているため、ネズミや虫などから食料を守る役割がある。

### 牛（グロウ）

自給自足の生活を送っているカレン族ではあるが、現金収入を得るための重要な手段の一つとして、飼育されメチェムなどの都市部へと売られていく。

### 水牛

水牛は牛と同じく現金収入という面を持ちながら、田んぼを作る際には田んぼを耕す農耕牛として活躍する、また畑の雑草を食べるので畑の整備にも一役買っている。

### 豚（ト）

カレン族の食事の習慣としては、料理の中で食べられない部位（骨）などを外に捨てるという事がある。そこで、豚は捨てられた残飯や食べられない部位を食べるので村の中の掃除屋として活躍している。また、豚はカレン族のお祝いの際に食されることが多い。

### ニワトリ（チョ）

また、鶏の産む卵や鶏そのものは貴重な食料である。さらに、狩りを行う際、獲物をおびき寄せるおとりとしても活躍している。



## ●カレン族の言葉

### 人 称

私	ザァ
あなた	ナァ
彼ら	ヌガァ

### 人の呼び方

母	ムー、モー
父	パー
おばさん	ムガ
おじさん	パティ
お嬢さん、お兄さん	ポ(プ)ッドゥ
こども	アポー
妹	アプー
姉	アガノー
友達	ヤコ

※実の～ 上の単語の最初にアを付ける

### あいさつ

こんにちは	オムチョブ
こんばんは	ハラゲー
元気ですか？	オチョア
おやすみ	ゲンミ
	ミモラムムー

### 基本的で重要な会話表現

はい	チャイ、カ
いいえ	マイ
いいね(goodのような)	アゲェ
名前は？	ヌミドゥルー

あなたは？	ナモ
[どうも]ありがとう	タブル[ドマ]
もう一回	リレ
知らない	レッシンニャ
終わり、たくさんです	バリ
疲れた	タブィ
大丈夫	マイペンライ
ダメ、よくないよ	タップルー
危ない	ローヒィ
みんな大好きです	ジャエナゴガ

### 生活系

シャツ、上着	チェカー
下の服	ポキ
洗う	スプー
料理	ポーター
仕事	マタ

### 食 事

ご飯ですよ	オメ
うまい	グィ
[とても]おいしい	ヴィ[ドマ]
[とても]辛い	アヘ[ラッ]
少しだけ	チケチケ
水を飲む	オティー
お茶を飲む	オティクロ
水いる？	オティーヤ
お酒を飲む	オシー
酔う	メヒー
ゆっくり	オベベ

いっぱい  
お腹いっぱい  
ごちそうさま  
甘い

オララ  
パカリ  
フープァークァー  
オブレオリ  
アチャー

### 食べ物

お米  
おもち  
かぼちゃ  
スイカ  
バナナ  
いも  
豆  
ナッパ  
唐辛子  
マンゴー  
ジャックフルーツ  
魚  
豚のおかず  
狐のおかず  
おかず、辛い佃煮  
木の实  
レモンバーム  
お菓子  
魚の内蔵のタレ

メ  
メトピ  
ルケボオ  
デトサア  
スクイ  
ヌイデレッ  
ヌエ  
スコオ  
スーバドオ  
ムサ  
スコサー  
スエシー  
ニャポー  
トニャ  
アニャ  
ムサト  
トゥエカ  
スンマナ  
コ  
ニャポイ

### 天気

晴れ  
雨  
曇り

ダックポー  
ムコチュー  
タッウー

嵐  
雪  
雷

ムコダチューラバ  
スーロー  
ラッセー

### 動詞

食べる  
寝る  
転寝をする  
行く  
来る  
薪割りする  
歯磨きする  
すりつぶす  
書く  
飛ぶ  
あげる  
もらう  
恥ずかしい  
走る  
濡れている  
泣く  
首に飾る  
歌う  
掴む  
取る  
拾う  
しゃがむ  
立つ  
水浴びする  
手をのばす  
祈る

オ  
ミ  
タミモサ  
レ  
ハイキー  
パーシムー  
レトウメ  
ドオー  
カ  
ズー  
パドウル  
ヌヒャナ  
メェシユカ  
ジー  
アベチョー  
アホ  
リ  
ウタサビ  
ヒラ  
ゲア  
ヒラゲア  
チノー  
チェトウー  
オルティー  
アラ(ロ)テ  
ゲスー

## 名 詞

飛行機  
川  
お皿  
スプーン  
水  
帽子  
ペン  
シャツ  
タオル  
ズボン  
靴下  
歯ブラシ  
時計  
腕時計  
くし  
懐中電灯  
タバコ、パイプ  
ノート  
タライ  
眼鏡  
糸  
糸巻き機  
機織り  
竹  
学校  
車  
山  
お祈り  
ロザリオ  
涙  
バイク  
くわ

クボー  
ティーグロ  
ロコ  
ノトウ  
ティー  
コモオ  
リボ  
チェカ  
クブ  
プロッキー  
トテイ  
ダトウメ  
ナリッ  
ナリカ  
スイ  
ダンミ  
モ  
リプ  
ガラマ  
メイクア  
ル  
レ  
ブネリヤー  
オヴァ  
マルダ  
ロ  
ダッウー  
バタ  
ペナー  
メサ  
メタポ  
ボーブラッ

やかん  
なべ  
たき火  
竹  
コップ  
ネックレス  
かばん  
スカート  
ズボン  
月  
星  
ろうそく  
ライター  
ティークロダ  
サバァー  
メウ  
ヴァーブロッ  
モックォルー  
ペェー  
タァーア  
ンニー  
プロッキー  
ラ  
チャ  
ソボー  
ルミ

## 形容詞

暑い  
涼しい  
暖かい  
長い  
短い  
速い  
[とても]かわいい  
うれしい  
寂しい  
冷たい  
タコッ  
タグー  
チョメウー  
タゴ  
トー  
プー、レー  
ジー  
ロッエ  
ナー[ラッ]  
サクラ、サクダ  
スズー  
アーキィリー

## 動 物

猫  
犬  
豚  
サミニョ  
チュイ  
ト

象	グチョ
鳥	トー
鶏	チョ
牛	グロウ
狐	アフイー
蟻	ダァ
トカゲ	クイ
カモ	チューとツーの間
わし	ルイ(Lの舌)

**曜日**

月	ムージャホ
火	ムーキニ
水	ムーサニ
木	ムールイニ
金	ムーセイニ
土	ムーフニ
日/休日	ムーアウイ

**からだの部分**

頭	コサ
髪	コスー
目	メェクリ
鼻	ナデ
耳	ナー
口	タクベ
肩	ティバ
腕	チョ
胸 (女性?)	ヌ
脚	コ
足	ゴラ
手	チュ

**色**

白	アヴァー
黒	アスー
茶色	アゴォ

**数字**

1	ター	6	フー
2	キー	7	ヌイ
3	スー	8	コ
4	ルイ	9	クイ
5	ジェ	10	チー

※参加者の聞き取りによる調査をまとめたものです。間違っている場合がありますのでご了承ください。

## 海外ボランティア 参加者一覧

※ 学年は参加当時のものです。

### ◎NEST 参加者

平林 夏子（長崎外国語大学1年）

日隈 尚人（長崎外国語大学1年）

瀧口 真由（長崎外国語大学1年）

### ◎一 般 参加者

古河 郷（長崎外国語大学3年）

### ◎同行スタッフ

藤田 勇樹（長崎外国語大学3年）

### ◎現地コーディネーター

阿部 羊子（女子パウロ会）

## 海外ボランティア 日程表

### 2月28日(木)

11:40 福岡国際空港 発 TG649

15:35 バンコク・スワンナプーム空港 着

現地コーディネーターのモド・羊子と合流

17:25 バンコク・スワンナプーム空港 発 TG116

18:35 チェンマイ空港 着

ジュパニーさんの出迎えを受け、荷物を積み込みそのまま食事へ

22:00 宿泊先(チェンマイのカトリック宿泊施設)に到着

ミーティングで自己紹介、目的地の確認などの準備をして就寝

### 3月1日(金)

7:00 起床

8:00 出発

途中でガソリン補給、朝食、昼食を済ませる

12:00 ディンカオ村到着

パド・チィと合流してオリエンテーション

17:00 目的地のオムレート村到着

夜 村人と初めてのミサ 日本人が紹介される

日本人だけで分かちあい

### 3月2日(土)

朝       ミサ 朝食  
午前      トイレ作りと村の寄合所でロザリオ作り  
午後      子供達とハンカチ落としなどで遊ぶ  
夜        お祈り 日本人で分かちあい

### 3月3日(日)

朝       ミサ 朝食  
午前      トイレ作り  
午後      子ども達と折り紙やサッカーをして遊ぶ  
          村人ほぼ全員参加でバザー  
夜        お祈り レクリエーション  
          参加者全員で拝啓15の君へ / アブラハムには7の子を歌う  
          日本人で分かちあい

### 3月4日(月)

朝       ミサ 朝食  
午前      トイレ作り  
午後      トイレ作り  
          途中、雨が降り教会の下で「だるまさんが転んだ」をして遊ぶ。  
          雨のあと村の広場で子供たちと縄跳び  
夜        お祈り 分かちあい

### 3月5日(火)

- 朝 ミサ 朝食
- 午前 トイレ作り
- 午後 川へ魚を取りに行く
- 夜 お祈り 村人にロザリオを贈呈  
村人と最後の分かちあい 村人に感謝の気持ちを伝える  
村人と一緒にアブラハムには7人の子を歌って踊る

### 3月6日(水)

- 朝 ミサ  
ギター・ハーモニカ、聖母マリアの絵、遊び道具を贈呈  
村人からも参加者それぞれカレン族の肩掛けバッグをプレゼントされる
- 9時頃 オムレート村を出発
- 12:00 メチェム到着  
昼食をとりパド・チィとお別れ
- 16:00 チェンマイ カトリックセンター到着 山岳民族のショップで仕入れ
- 17:00 カトリックセンター出発 ナイトバザールを見学 夕食
- 20:50 チェンマイ空港 発 TG121
- 22:10 バンコク・スワンナプーム空港 着  
コーディネーターのモド・羊子とお別れ

### 3月7日(木)

- 1:00 バンコク・スワンナプーム空港 発 TG648
- 8:00 福岡国際空港 着 解散



## 海外ボランティア 会計報告

### 予算の部

項目	日本・円	タイ・バーツ	備考
準備費	10,000		
航空券代	447,275		
保険代	22,500		
予防接種代補助	21,000		
交通費補助	6,000		
プロジェクト費	150,000		
予備費	3,225		
合計	660,000		

### 収入の部

項目	日本・円	タイ・バーツ	備考
保護者会活動支援費	30,000		NEST会計より補助(用途指定)
カフェ売上	30,000		NEST会計より補助(用途指定)
トイレ建設寄付	30,000		用途指定寄付
寄付金	70,000		一般寄付
参加費	500,000		100,000×5名
合計	660,000		

### 支出の部

項目	日本・円	タイ・バーツ	備考
航空券代	447,275		89,455×5名
保険代	22,500		7,500×3名
予防接種代補助	21,000		7,000×3名
交通費補助	6,000		2,000×3名
準備費	9,209		お土産・生活用品・薬・食料など
両替	149,520	—	現地プロジェクト費(滞在費・謝礼)
プロジェクト費	—	42,000	内訳①
合計	655,504	42,000	

※両替時レート 1円=0.365バーツ (1バーツ=3.65円)

## 内訳① 現地プロジェクト費

項目	日本・円	タイ・バーツ	備考
謝礼		16,290	内訳②
食費		6,020	朝食1回 昼食2回 夕食2回 その他食料品
仕入れ		5,013	
その他		1,230	チップ、駐車場代、通行料
合計		28,553	

## 内訳② 謝礼

項目	日本・円	タイ・バーツ	備考
Sr. 阿部		6,290	バンコク～チェンマイ航空券・タクシー代・謝礼
チィ神父様		10,000	トイレ建設費・運転手謝礼・ガソリン代・謝礼
合計		16,290	

## 決算

	予算	支出	残金	備考
円	660,000	655,504	4,496	NEST 会計へ
バーツ	42,000	28,553	13,447	NESTEP へ引き継ぎ

## 「一期一会」～人生を変える経験～

長崎外国語大学 1年  
瀧口 真由 (NEST)

このスタディーツアーは私にとって、人生を変える経験であった。タイに着いた初日、自分は今から6日間も山岳地帯の村でやっていけるのか不安だった。村まで、崖のようなところや、驚くほどの急な坂など、ワイルドな道を5時間ひたすら走った。太陽の日差しは強く(チェンマイは39度だった)砂ぼこりは今まで経験したことないほどで、大きい布をフードにして被っていたのだが、村に着いたとき抹茶色になっていた。

お湯もなく電機も通ってないことを事前に聞いていたが、村は想像をはるかに絶するものであった。TVで見たことがあるような、俗世とは離れた村だった。村は自然と共存しており、家畜でいうと豚や水牛などもたくさんおり、全て放し飼いだっただけでなく、また、あちこちに牛のフンが落ちているのが印象的であった。最初は踏まないように、細心の注意を払いながら歩いていたが、あとあと見ずにでも踏まないように歩けるようになり、不思議で驚いた。お湯や電気もなく最初は少し不便だと感じたが、それでも普通に生活することができた。

村での初めての夜、私たちはすごく綺麗な星空を見た。案の定、電気という電気は私たちが持参した懐中電灯しかなかったため、それを消すと、今まで見たこともない満点の星空を見ることができた。ちょうどこちらでは天の川がかかっており、それは本当に美しいものだった。また人生初の流れ星も見た。

私が一番うれしかったことは、村人たちと仲良くなれたことだ。私たちの行ったオムレート村は、キリスト教師の来訪以来、外国人が訪れたのは初めてだそうで、最初は痛いほど見られた。こちらのつたないカレン語でコミュニケーションを図ろうとしても、じっと見るだけでなにも話さなかった。このまま帰るのは絶対嫌だと思い、2日目から積極的に話しかけることに努めた。会う人会う人にあいさつをし、犬や豚を見かけたら、事前に学習した少しの知識をフル動員して村人たちに言ってみたり、とにかく色々した。最初は、じっと見るだけであったり、一歩距離をおいて返事をしてくれたりだったが、次第に私の発音を直してくれたり、指をさして物の名前を教えてくれたり、逆に日本語でなんて言うか聞いてきたりと、向こうからも声をかけてくれるようになった。ある女性と鶏の鳴き声のマネをしあったのはいい思い出だ。

5日目の夜、私は使うためにもって来ていたハンガーやタオルなどを家族にあげて精一杯の感謝を込めて歌を歌った。私は、今夜は家族と一緒に寝たいと思った。客人として接してほしくないと思った。そのとき、おばあちゃんが「一緒に寝たいかい？」と聞いてくれ、本当に嬉しかった。それから寝るまで家族と話をした。実際のところまったく分からなかったが、自分なりに感じ取ることができた。おだやかで少し無口なお父さんが、「マユは明日帰るんだろう？」と言い、私が「カ（うん）」というと、お父さんは「スズー（寂しい）」と言った。悲しみを感じていると、「私たちはマユが日本に帰っても祈っているよ。」と言われ、ふっとその悲しみが消えた。会えなくても、お互いが繋がっていられるような気がしたからだ。「私も。」と言いたかったが、何と言えばいいのか分からなかったので、身振り手振りと言語で伝えた。うんうんと首を縦に振ってくれていたのも、多分伝わったはずだ。本当に家族になった気分で、その日最後の夜にして一番ぐっすり眠れた。

このスタディーツアーを通して得るものは本当に大きかった。行く前と行った後で物の見方や考え方が変わった。また、生まれた国や場所が違っても、人は仲良くなれると感じた。そして、村での生活や、バザーを通して感じたことなのだが、自分の買ったものはもっと大切に使い、少しでも長く使っていきたい。身近にいる友達、家族、そして人との出会いをもっと大切にしていこうと思う。

## タイ・ボランティア&農村ホームステイ感想文

長崎外国語大学 1年  
日隈 尚人 (NEST)

2月28日 タイへ向けて朝から出発。空港で今回タイに行く全員と集合し意気揚々とタイへ向かった。タイ航空のCAさんは本当に綺麗な方ばかりだった。途中、飛行機を乗り換え夕方方にタイのチェンマイに到着。空港を出ると、気温は高くカラッとした空気だった。そして空港に迎えに来てくれていた、ジェニパーの車の荷台に乗って初日の宿へ向かった。タイの街を夜風に当たりながら走り、街の景色はテレビで見るような東南アジア独特の雰囲気です路上にはたくさんの露店が軒を連ねていて、日本にはない雰囲気を肌で感じた初日だった。

3月1日 村に向け朝から出発し、途中大きな教会のあるディンカオでパドチーと合流。ここでジェニパーとお別れし、パドチーの運転でさらに舗装されていない山道を進んだ。道もガタガタで座っているのも容易ではない道のりで、本当に凄惨な所に行くのだと改めて思った。

村に到着してからの日々はあっという間で、村での初日は緊張していたせいか早くに目が覚めた。朝ご飯のご飯と青菜のスープを食べてからは、朝からトイレ作りの手伝い。セメントの砂と石を運び、支柱を立てる穴を掘った。手伝ってくれたおじいちゃんがお茶目な人で笑顔が絶えなかった。日中はかなり暑く村人も一番暑い昼時は昼寝をしていて、自分も昼寝をし、早くもタイに染まって来たように感じた。午後には子供達と日本から持ってきた遊び道具で遊んだ。ハンカチ落としはかなり盛り上がり、みんな疲れ知らずで、かなりクタクタになりながら遊んだ。キャッチボールやフラフープでも遊んだ。シャイな子が多く、やり方を教えようとしても、すぐ隠れてしまったが、その場を自分たちが離れるとみんな楽しんで遊んでいた。本当にシャイだなと思いながらも、子供たちの笑顔が凄く印象的だった。そして夕方に初めてのオルティー。久々の水浴びで気持ちよかった。晩ご飯は初めて他家から呼ばれ、初めて鶏(チョー)を食べた。地鶏のような感じですごくおいしかった。

翌日、トイレ作りでは手伝えることが少なかった。それでも作業を手伝っていたら気分が悪くなり熱中症になりかけたが、水を頭にかけてもらい休んだら落ち着いた。タイの暑さは本当に凄惨。それから子供達に折り紙を教えた。みんな思った以上に不器用だった。(笑)しかし、やはりシャイなので、そこはこうだよと教えようとしてもすぐ後ろを向いて折り紙を隠してし

まう。その姿が可愛くてしょうがなかった。結局うまく出来た子は少なかったが、楽しそうに何よりだった。夜はアブラハムを披露した。子供たちには大うけで、一気に村人との距離が縮まったように感じた。言葉だけがコミュニケーションではないのだと改めて感じた。

そして次の日には、トイレ作りはほぼ終わり水をひくだけになった。午前中は学校へ行って村の子供たちが勉強している姿を見た。私は教師を目指しているのもとても興味深かった。タイ語が喋れたら勉強を教えることができるのにも思ったが、喋れなくても伝えられることの大切さも感じた。そして夕方、川に魚を捕りに行った。私は魚が大好きなので興奮した。野生のスネークヘッドをわしづかみなんて夢のようだった。ちなみに昼ご飯はアリの幼虫、ワシのスープを食べた。もちろん食べることも大好きなので、本当に楽しく幸せで笑顔が本当に絶えない日だった。

そして村での最終日は、朝から学校をさぼっていた男の子二人と学校へ行った、紙と鉛筆を持っていなかったのも、自分の持っていたメモ紙とペンを貸した。そしてそのあと笑顔でダブル（ありがとう）と言いながらメモ紙とペンを返しに来た。メモ紙には勉強した内容が書いてあり、照れくさそうにしている、もう本当に連れて帰っちゃおうかなと思ってしまうぐらいだった。そしてみんなの写真を撮った後、車の荷台に乗り幸せな気持ちで村を後にした。

私が一番感じたことは笑顔の大切さである。言葉は通じなくても笑顔さえあればどうにかなる。笑顔は人を幸せにし、自分も幸せにする。そのことを身にもって感じる事ができた素晴らしいツアーであった。

## 2013 春 タイ・スタディーツアーでの経験と感じた事（日記形式）

長崎外国語大学 1年  
平林 夏子 (NEST)

### 3月1日（金）

初日は、村はどんな場所にあつて、これからどのような生活を体験するのか、緊張と期待が入り混じった気持であつた。舗装されていない山道に揺られながら、まさに冒険をしているという高揚感もあつた。村に着いてから長老らしきペカさん（お父さん）のお宅に泊めてもらうことになった。優しそうなホストファミリーに会えて安心したが、赤土の埃、野放しの動物、道や広場にあるフンの多さに不安を覚えながらお家まで歩いた。数日前に PM2.5 で痛めたと思われる喉の調子が悪く、ガラガラ声も治る気配がないので、村での衛生面が気になって不安でいっぱいだ。30代の体力についていけるだろうか。しかし、郷に入つては郷に従えだ！この環境に身を委ねてみて、心身共に村での暮らしを吸収したいと思う。

### 3月2日（土）

村での2日目は、子ども達と初めて遊ぶことができ嬉しかった。「ハンカチ落とし」を1時間くらい続け、永遠にできるのではないかというくらい、子ども達の遊びに対する集中力と熱気が印象的だった。ルールを言葉で伝えるのは難しいので、デモンストレーションを何回かする中で、直ぐに理解してくれたので安心した。最初は恥ずかしく躊躇していた子ども達も、ゲームが過熱するにつれて声を上げて笑ったりして、私たち学生と少し打ち解けられたのではないかと思う。笑いのツボは、万国共通だと実感！

### 3月3日（日）

今日は、子ども達と「折り紙」「アブラハムには7人の子」などの遊びができて楽しかった！日本語を教えてと言われて、挨拶や魚（＝ニャポ）などの簡単な単語を教えた。ホストファミリーと過ごす時間が少ないので、明日からはもう少し家にいる時間を作ろう。モド（＝シスター）が今日の振り返りの時間に、「この数日間、時間に動かされているのではなく、自分自身が動いている感覚」とおっしゃっていたが、まさにその通りの感覚である。時計に動かされず、お日様と自然のリズムの中で過ごすのはなんと気持ちの良いことだろうかと感じた。暑い昼間は動かずに家や集会場の風通しの良い所から村を眺めたり、歌の練習をしたり、本当に気持ち

が良い！

### 3月4日（月）

ホストファミリーと午前中の半分を一緒に過ごして楽しかった。スック（お兄さん）とスルー（叔母さん?!）が村を去る日だったらしく、朝から蒸留酒のようなシー（＝酒）を造っていた。オシー（＝酒の飲みな〜）と誘われたが、タイミング合わずこの日はお酒にありつかなかった。その間、パティ（妹さん）と指差しタイ語ブックを使いながら色々話して楽しかった。パティは19歳だと知る。カレンの女性は、結婚は21歳くらいにするという。カレンの村ではお婿さんを迎える形式だ。高校生の弟さんは、今は山の麓にある寄宿舎の学校にいるそうだ。弟さんが使っていた英語のノートを見せてくれて、英語がわかりそうなので、英語と日本語でそこに手紙を書くことにした。

午後は家の周辺のごみ拾いをした。古いプラスチックの破片や燃え残ったような既製品がどこにでも落ちている状態で、気になっていたからだ。お菓子の袋や缶が多く、薬の瓶まであった。1メートル四方の大きなごみ袋に、30kgぐらい集めたが、色々複雑な思いがする。ごみとは何なのかを考えさせられた。残飯なら下に落として豚などが食べてくれるし、日用雑貨も竹籠や綿なら燃え残らないし、土の上にそのまま捨てても土に帰りやすい。自然のサイクルが少し前までは成り立っていたのだろう。何も疑わずに、プラスチック製品も同じように扱っている感じがする。彼らにとってごみという概念は私たちの概念とは違うもののような感じがする。

### 3月5日（火）

昨日は、色々なことをして、色々考えさせられた日だった。午後はごみ拾いの後、トイレ作りをしていたら、雷と強い雨（＝ムコチュー）が降り出して教会の下で雨宿りをした。雨宿りを子ども達としている間、「だるまさんが転んだ」を「ター・キー・スー（1・2・3）」とアレンジしてやった。子ども達の呑み込みが早い！「初めのい〜っぽ！」の掛け声だけは日本語でやっていたら覚えてくれた。今日、子ども達だけでター・キー・スーをしているのを発見！子ども達の満面の笑みが見ていてたまらない！午後は村人たちとパド（＝神父さん）と川に魚（＝ニャポ）を獲りに行った。車で30分、下に降りる。デコボコの道をピックアップトラックの荷台に乗って揺られながら。村人たちと体を寄せ合いながらガタガタ揺られて自然と笑みがこぼれる。川がきれい。冷たい。水も緑もそよ風に揺られてキラキラしている。チョウトン



ボが綺麗だった。日本にもいるそうだが、関東では見たことがない。黒とオレンジのストライプの川蛇に遭遇。ゾットした。とにかく全てが大自然で心も体も浄化されていくような、清々しい気持ちだ！！

### 3月6日（水）

とうとう村での最終日が来てしまった。朝からなんか気持ちが落ち着かない。朝ごはんの用意をサビィー（お母さん）とする。ムサトー（＝青唐辛子のおかず）をつくる為にすり鉢でゴリゴリと。近所の2歳くらいのシャイな子どもスンニィーが初めて私に声を発してくれた！バイバイチューと投げキッスくれて。抱っこもねだってきて。可愛すぎる！お別れを察してくれたのかな。最後は涙なみだ～のお別れ。

オムレート村では、豚も牛も鶏も犬も猫も囲いのない中で生活して、そこに自由があった。そこら中にあるフンも途中からは気にならなくなっていた。自然のものは全て土に帰る。だから気にしない。そう思うようになっていた。夜寝ている時に、私の部屋の真下で豚がブヒブヒ会話してたこと、最終日に水牛に懐中電灯を当ててしまっ襲われそうになったこと、リスや綺麗な小鳥たち、スネークヘッドを食べてしまったこと等、動物たちや自然が色々私に教えてくれた気がする。子ども達とたくさん笑ったこと、言葉は通じないけど身振り手振りで話したこと、全てを心と体で感じた経験は言葉では語りつくせないものである。色々な価値観や生活、自然との共生を肌で感じた1週間であった。

最後に、オムレート村の人たち、自然、全てに感謝！！ダブル（＝ダブル）、ダブル、ダブル・ドマ！！

大切なことはすべてカレンの人々が教えてくれた。

長崎外国語大学 3年  
藤田 勇樹 (スタッフ)

「言葉が通じればどれほど良かっただろう。しかし、言葉が通じなくてもいいと思えた。」

カレンの人々との生活は身振り手振り、数少ない覚えたてのカレン語を使ったコミュニケーションが基本だ。あとは笑顔。まず子供と仲良くなれば、家族とも仲良くなれるということで、コミュニケーションをはかってみるものの、シャイなカレン族の男の子。全く話してくれない。おそらくカレン語もまだわからないのかもしれない。だんだん近づいてきて、僕の真似をしたり、自分の自慢のおもちゃを見せてきたりした。あの「にこっ」と笑う顔が今でも忘れられない。

昨年、初めてカレンの人々を訪れ、感動的な体験をした僕は「この体験を後輩たちにも！！」との思いから、その熱い想いをいつも語っていた。その情熱に飲まれた4人が今回参加してくれた。今回は本当にこのメンバーで行けてよかったと思う。そう思えたのは、村で過ごしている間の彼らの表情・行動・言葉だった。たくさん泣いて、たくさん笑った。普段は見せない彼らの姿に感動した。そして極めつけは、ある参加者が言い放った「幸せだった！」という言葉。おそらく村で過ごしている間、「どんな時が一番楽しいか？」と聞くと、皆口を揃えて「今でしょ！」と答えただろう。それぐらい一瞬一瞬を幸せに感じ、楽しみ、魂がイキイキしていた。今回のスタディーツアーを準備するにあたって多くの困難に見舞われたが、それらが一気に報われた。彼らと一緒に来れて、ホントによかった！

今回のスタディーツアーの目的は「共用トイレの建設」「子ども達との交流」であった。しかし、本当の目的は別にある。それは、僕がこのスタディーツアーを「里帰り」と呼んでいるところにある。電気も水道もインターネットもない。日本での生活とはかけ離れたカレンの人々の暮らしは、「貧しい」というより「質素」な生活をし、人間本来のあるべき姿を彼らは見せてくれた。「人間の故郷」それがカレンの村だ。原点に帰って、自分たちの日本での生活を見つめなおし、「人間これでも生きていけるなあ」というのを感じて欲しかった。そして、もうひとつの目的がある。「本当の支援のあり方を考える」国際協力に携わる人として、「本当の支援とはなんなのか。」これは決して、一方通行の支援ではなく、「お互いが持っている能力

や技術、モノを分かち合う。そして、友となり共に働く」ということだと考えている。「分かち合う」「友達になる」「一緒に働く」今回の「里帰り」の間にどれだけ実践できただろう。そしてこれからも問われていこう。

最後に村人がこんなことを言ってくれた。「日本人が帰って、寂しくなってもトイレを見たら思い出すから」と。「大丈夫。僕も寂しくなったら、星を見るから」

カレンの人々に、たくさんのタブルドマ！（ありがとう）。バリ！（終わり）

## タイ・ボランティア&農村ホームステイ感想文

長崎外国語大学 3年  
古河 郷 (一般参加)

村での食事は米を中心として、その日村人たちがわざわざとってきてくれたものを頂いた。私たちが普段何気なく食べているお米でさえもこの村では貴重なものだった。そして滞在中に用意された食事にはアリ・キツネ・ワシ等日本では到底口にすることのできないようなものばかりであった。最初は驚いたが口にしてみるとどれもおいしく食べられるものばかりであった。

今回の研修の中で私の勉強意欲が強く喚起されたことがあった。村人を集めてバザーを行った、そこではシスターが方々から集めてきた洋服や生活用品を手作りのお金で販売するという形をとった。ビニールシートをひいてできるだけ見栄えよく商品を置いた即席のバザー会場には沢山の村人が集まってくれた。言葉もろくわからない中、身振り手振りで村人に対応していく。商品を並べている段階から目をつけていたのか、お母さんたちは生活用品を、子供は洋服や筆記用具をといた具合に開始直後から怒涛の勢いで商品が売れて行き、気が付けばビニールシートの上からは商品がきれいになくなっていった。村人がそれぞれ購入したものを見ながら満足げに笑っている姿を見て、バザーの成功を感じる事ができた。

しかし、そろそろ会場の片づけを始めようとしたとき、村の男性がシスターと何か話していた、どうやらお金が余ってしまったらしい、シスターが何かないかな？と悩んでいたのもので私は自分の履いていた靴を売ることが出来ないかとシスターに尋ねた。村で生活する中ですっかり汚れてしまった靴であったので了解してもらえるかは不安であったが、シスターは提案を快諾してくれて、その男性も靴を気に入ってくれたようでとても嬉しかった。その後、シスターから靴を購入した男性が「もっと話すことが出来れば楽しいのに」と話していたことを聞いてもっと語学を頑張ろうと思えた。

次に、現地の子供たちとの交流についてだ。事前の説明で村人は最初恥ずかしがることがあると聞かされていたので子供たちと交流できるか不安だったが、持ち込んだ折り紙や縄跳びを使って一緒に遊ぶことが出来た。その時初めて子供たちの笑顔を見ることが出来たのだが、とてもかわいくて、言葉が無くても気持ちを伝えることが出来るのだなと感じた。

## 海外ボランティア アンケート

帰国後、参加者にアンケートをとりました。

### 質問① この海外ボランティアで幸せを感じましたか？それはどんな時か？

- ・はい。村人の笑顔を見たとき
- ・子供と交流したとき、久しぶりに童心に帰れたこと
- ・YES 言葉が通じなくても、互いにコミュニケーションが取れたとき。  
作業後のオメとオルティーも。

### 質問② この海外ボランティアに参加して得た、これからの目標は？

- ・またタイに行くための資金を貯めること
- ・英語の習得。伝えたい気持ちを言葉にしたいと思った。
- ・周りの人を大切に生きて生きる。ものを大切に、一日一日を大切に生きて生きる。

### 質問③ この海外ボランティアに関して、何か問題点はありましたか？

- ・特になし
- ・携行品リストに「水筒」を追加
- ・もう少しカレンについて調べていけばよかったなと思いました。

### 質問④ この海外ボランティアを通して学んだことは？

- ・笑顔の大切さ
- ・言葉がなくても交流できること
- ・言葉が通じなくとも、コミュニケーションがとれる

### 質問⑤ この海外ボランティアに参加しようと思ったきっかけは？

- ・めったにできない経験をすることができるチャンスだから。
- ・熱烈なセールストークを受けて
- ・誘ってくれた人の熱意

### 質問⑥ この海外ボランティアに参加する前、心配だったことは？

- ・病気や衛生面

- ・山中の村だったので気候の変化
- ・衛生面、空港のテロ（当時、テロに関する情報が出ていた）

質問⑦ この海外ボランティアに参加して感じた、自分の中での変化とは？

- ・ニュースなどを見ている、自分達の視点だけでなくいろいろな視点を持つこと
- ・アウトドアに興味を持った。
- ・ポジティブになった。生活習慣が改善された。

質問⑧ この海外ボランティアで一番印象に残っている出来事は？

- ・川での魚とり
- ・「アブラハムには7人の子」をみんなで踊ったこと
- ・オムレート村のみんなの優しさ。電気やお湯がなかったってたくましく生きているところ

質問⑨ あなたのにとってこの海外ボランティアでの体験とは？

- ・貴重な経験で視野を広げることができた。
- ・自分のカラを破るものだった。
- ・人生180度変わりました。

質問⑩ 次回も参加したいですか？あるいは友人に勧めたいですか？

- ・はい！！
- ・次回も参加したいです。
- ・したいです！！格安なので少しでも興味がある人にはぜひ行って見て欲しいです。

活動写真集



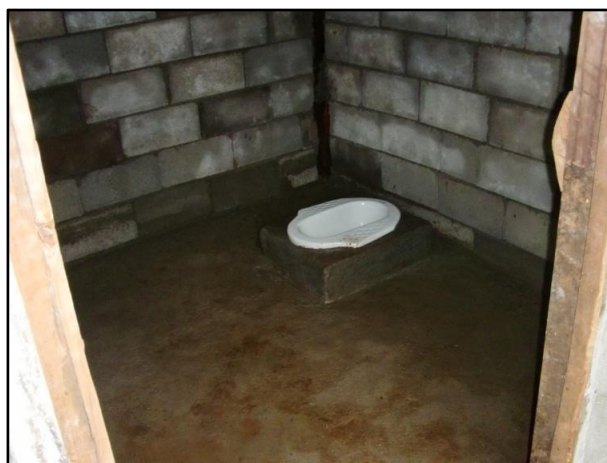
オムレート村



村の中心にある教会



完成した共同用トイレ（外観）



完成した共同用トイレ（内部）



カレンの食事は基本的に辛い！



高床式住居に住む



カレン族伝統の「腰織り」



足踏み脱穀機



教会前の広場で子供達とサッカー



ターキースー！（だるまさんが転んだ）



支援物資のバザー（買い物ごっこ）



折り紙で遊ぶ





村の男の子たち



教会ではカレン語教室



参加者と家族（前列中央はコーディネーターのモド・羊子）

## 編集後記



「次にまた村に帰るまでが海外ボランティアです！」

7日の朝、日本に戻ってきて空港でこうしめくくった。「人間の故郷に帰ろう」それが今回の海外ボランティアのテーマでありスタイルである。

おそらく参加者たちは「何かをしてあげよう」という気持ちがあったかと思う。でもそれ以上に村人は私たちに与えてくれた。「愛」というと、ちょっとうさんくさいかもしれないが、

今回の海外ボランティアではその一文字がしっくりくる。

マザーテレサが言った。「平和は微笑みから始まります。」確かにこの村には笑顔があった。そして平和があった。私たちが想像する「平和」は、かけ離れていたところか、こんな身近な所にあったと気付かされた。

電気もない。水道もない。ネットも繋がっていない。そんな生活を体験して「人間これでも生きていけるなあ」と思いつつ、時間や仕事に追われる毎日を送っていた日本に帰りたくなかったのは私だけではないだろう。きっとまたこの村に「帰ってくる」そう思うと、また日本で頑張れそうな気がした。ちょっと「愛」の足りない日本。この村で受けた、たくさんの「愛」をどれだけ周りの人に与えられるだろうか。さあ、旅はまだ始まったばかりだ。

共同代表 藤田勇樹

## 海外ボランティアへの支援にご協力ください！

**寄付金** 5,000円 3,000円 1,000円 とお選びいただけます。

小額でも構いません。大切にに使わせていただきます。

振込先 ゆうちょ銀行 17420-38529481

名義 フジタ ユウキ (代表)

※「用途指定」「用途自由」をお知らせください。

**支援物資** 衣類・生活用品・文具を集めています。

○衣 類・・・子供用半袖半ズボン 薄手の長袖を集めています。

○生活用品・・・プラスチック製の食器、タオル、ハンガー

○文 具・・・ボールペン、鉛筆、ノート

ご支援くださる方は [ngonestep@gmail.com](mailto:ngonestep@gmail.com) までお問い合わせ下さい。